

『從吾道人語録』の研究

——「求心録」(下)——

水野 実・三沢 三知夫 編

序 言

本稿は『從吾道人語録』の研究——「求心録」(上)——に続く「求心録」の基礎的研究で、体例等はすべて前稿に従うものである。なお『從吾道人語録』、董澧に関する略説は前稿を参照されたい。

この研究の参加者は次の通り。阿部光麿(早稲田大学助手)・大場一央(早稲田大学大学院博士後期課程)・上村新治(早稲田大学大学院修士課程)・小池直(早稲田大学大学院修士課程修了)・田村有美恵(早稲田大学大学院修士課程)・富岡健太郎(早稲田大学大学院修士課程修了)・中嶋諒(早稲田大学大学院博士後期課程)・土後期課程)・原信太郎(早稲田大学大学院修士課程修了)・松野敏之(早稲田大学大学院博士後期課程)・宮下和大(早稲田大学大学院博士後期課程)・三沢三知夫の十一名。全員で検討・修正した原稿を基に、阿部・松野・宮下・三沢の四君と再三検討を行い、最後に三沢君と補正を行い、三沢君にまとめてもらった。

この研究成果の最後の責任は水野にあるが、参加者全員、特に三沢君をはじめ阿部・松野・宮下君の業績でもあることを明記しておく。

なお、この度「蓬左文庫本」の定本を「尊経閣文庫本」と照合し、確定することが可能となったものがあり、それを「校異」(四)として明記することにした。

【三十一】

学道、先須細識心。細中之細、妙難尋。若能尋到無尋处、方□□□是聖心。噫、人与堯舜初無少異者、果□□□。

〔訓読〕

学の道、先づ須らく細しく心を識るべし。細中の細、妙にして尋ね難し。若し能く尋ぬる無き処に尋ね到らば、方に凡そ心は是れ聖心なるを信ぜん。噫、人の堯舜と初めより少異無き者、果たして□□□。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)〔尊經閣文庫本〕

「尊經閣文庫本」は「方□□□」を「方信凡心」に作り、本則はこれに従って読んだ。ただし「果□□□」については「尊經閣文庫本」も不明である。

〔校異〕(補)〔錢明編校整理 陽明後学文献叢書』徐愛 錢德洪 董濬集』(鳳凰出版社、二〇〇七年)

『徐愛 錢德洪 董濬集』は「果□□□」を「果何在乎」(果たして何くに在らんや)に作る。

【三十二】

答学者問格物云、格物者、凡事物之来、或可或否、一皆以天理正之、使得其宜也。天理在何処。即是吾心本有之良知也。今人遇事接物、只因不肯放出天理、処之不得其宜、自昧其心、即是良知不尽、若能自家心中覺得理当如此、即便依此理、去処此事、謂之正物。物正於外、而知尽於内矣。此正是合内外之道。故曰、致知在格物。物格而後知至也。知之所在、即是意。只因不肯依著良知行去、所以意中發出許多虚詐。若能依了良知、一循天理、則意豈不誠乎。故云、知至而後意誠。若夫心之本体、不拘動靜、湛然常寂。蓋無極之貞元、是如此非強制也。今人無事時千思百想、有事時略行小善、常常掛念、亦是私意。用事殊不想心之本体、止因理上、合当如此並無別。故今若多了這些意思、則心之本体、便不正了。若能未来莫迎、已往莫留、就与明鏡一般。這箇方是本来心体、方是大公至正。故曰、意誠而後心正。心正即中、身修即和。

学者の格物を問ふに答へて云ふ、「格物とは、凡そ事物の来、或いは可とし或いは否とするも、一に皆、天理を以て之を正し、其の宜を得しむるなり。天理、何処にか在る。即ち是れ吾が心の本有の良知なり。今の人、事に遇ひ物に接するに、只だ肯へて天理を放出せず、之を処するに其の宜を得ず、自ら其の心を昧くし、即ち是れ良知尽くさざるに因り、若し能く自家の心中に理の当に此の如きを覚（得）すれば、即便ち此の理に依り、此の事に去処し、之を正物と謂ふ。物、外に正されて、知、内に尽す。此れは正に是れ内外を合するの道なり。故に曰く、『知を致すは物を格すに在り。物格して後に知至る』と。知の在る所は、即ち是れ意なり。只だ肯へて良知に依著せず行き去るのみに因りて、所以に意中に許多の虚詐を發出す。若し能く良知に依（了）り、一たび天理に循らば、則ち意、豈に誠ならざらんや。故に云ふ、『知至りて後に意誠なり』と。若し夫れ心の本体は、動靜に拘はらず、湛然として常寂たり。蓋し無極の貞元、是れ此の如く強制に非ざるなり。今の人、事無きの時、千思百想し、事有るの時、小善を略ぼ行ふ。常常、念を掛くるも、亦た是れ私意なり。事を用ふるも殊に心の本体を想はず、止だ理上に因りて、合当に此の如く並な別無かるべし。故に今、若し這些の意思を多（了）くせば、則ち心の本体、便ち正（了）しからず。若し能く未來に迎ふる莫く、已往に留むる莫ければ、就ち明鏡と一般なり。這箇は方に是れ本来の心体なり、方に是れ大公の至正なり。故に曰く、『意識にして後に心正し』と。心正しければ即ち中なり、身修むれば即ち和なり」と。

○使得其宜也 『王文成公全書』卷之五、文錄 一、書、「答董澐蘿石」に「心、其の宜を得るを義と為す。良知を致さば、則ち心、其の宜を得」とある。また「日省録」第三則に、「心、其の宜を得るを之れ義と謂ふ。良知を致さば、則ち心、其の宜を得」とある。

○正物 『伝習録』中、「羅整菴少宰に答ふる書」に「正心とは、其の物の心を正すなり」とある。
○致知在格物。物格而後知至也 『大学』経に「知を致すは物を格すに在り。物格して後に知至る」とある。

○知至而後意誠 『大学』経に「知至りて後に意誠なり」とある。

○貞元 元亨利貞の循環において貞のもとに生ずる元であり、始原を意味する。

○略行 その要だけを行うこと。

○掛念 念頭に留めること。

○意誠而後心正 『大学』経に「意誠にして後に心正し」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

答許宣仲問致知云、心之良知謂之聖。良也者、無一毫人欲之雜之謂也。知也者、智也、虛明靈覺、無一事不察之謂也。此即心之本体也。故先師夫子提出良知二字以示人。蓋謂心之本体、最善於知、欲人易識其本体而一切依憑之以行也。所謂致者、知得如此、即須如此行之、務極其至也。惟恐人之行有不能尽其良知之所知。是故務在靜虛、以養其未發之中、時時反觀內照、不容己私少障。此即所謂致知也。故先於立志、將胸中旧染一一蕩滌、求其放心為主、省察克治改過遷善。靜時念念去人欲存天理、動時念念去人欲存天理、不論動靜、凡意念所在、無非去其不正以全其正。此即所謂格物也。夫致知者、格物之主意也。格物者、致知之工夫也。故先師嘗曰、不本於致知而徒以格物者謂之妄。故君子之學、能致力於知。致良知、則於凡天下之事無不能處、而吾之心體無不尽矣。此便是聖人之道也。

〔訓読〕

許宣仲の致知を問ふに答へて云ふ、心の良知、之を聖と謂ふ。良とは、一毫の人欲の雜はり無きの謂ひなり。知とは、智なり、虚明靈覺にして、一事として察せざる無きの謂ひなり。此れ即ち心の本体なり。故に先師夫子、良知の二字を提出して以て人に示す。蓋し心の本体と謂ふは、最も知に善たりて、人の其の本体を識り易くして一切、之に依憑して以て行ふを欲すればなり。所謂致とは、知り得ること此くの如くんば、即ち須らく此くの如く之を行ひ、務めて其の至を極むべきなり。惟だ恐らくは人の行ひに其の良知の知る所を尽す能はざること有り。是の故に務めて静虚に在りて、以て其の未発の中を養ひ、時時に反觀内照し、己私の少障を容れず。此れ即ち所謂致知なり。故に立志を先とし、胸中の旧染を將て一一蕩滌し、其の放心を

求むるを主と爲し、省察克治・改過遷善す。靜時には念念に人欲を去り天理を存し、動時には念念に人欲を去り天理を存して、動靜を論ぜず、凡そ意念の在る所、其の不正を去りて以て其の正を全ふするに非ざるは無し。此れ即ち所謂格物なり。夫れ致知とは、格物の主意なり。格物とは、致知の工夫なり。故に先師嘗て曰く、致知に本づかずして徒らに以て格物する者、之を妄と謂ふ、と。故に君子の学は、能く力を知に致す。良知を致さば、則ち凡そ天下の事に於て処する能はざるは無く、而して吾の心体も尽くさざるは無し。此れ便ち是れ聖人の道なり。

〔語釈・出典〕

○許宣仲 未詳。

○心之良知謂之聖 この七字は『稽山承語』第十七条に見える。『孔叢子』記問には「心の精神、是れ聖なり」とある。

○虚明靈覺 心の働きが靈妙で明覺なこと。『伝習録』中、答顧東橋書に「心の虚靈明覺は即ち所謂本然の良知なり」とある。

○依憑 頼み依る。

○少障 わずかな障蔽。

○旧染 『王文成公全書』卷之二十六、続篇 一、「改過」に「能く一旦、脱然として旧染を洗滌すれば、昔、寇盜を為すと雖も、今日、君子たるを害せず」とある。『大学章句』新民章には「以て其の旧染の汚を滌して自ら新たにする有り」とある。

○蕩滌 洗い清める。

○求其放心 『孟子』告子上に「其の放心を求むるのみ」とある。

○改過遷善 『通書』乾損益動第三十一に「君子は乾乾として誠なるに息まず。然して必ず忿を懲し、忿を窒ぎ、善に遷り過を改めて、而して後に至る」とあり、これは『周易』益卦、大象伝の「風雷あるは益なり。君子以て善を見ては則ち遷り、過ち有らば則ち改む」に基づく。

○凡意念所在、無非去其不正以全其正。此即所謂格物也。『伝習録』上、第七条に「先生又曰く、格物は孟子の大人は君心を格すの格の如し。是れ其の心の不正を去りて、以て其の本體の正を全くするなり。但だ意念の在る所、即ち其の不正を去りて以て其の正を全くするを要す」とある。

○故先師嘗曰、不本於致知而徒以格物者謂之妄。「大学古本序」(改稿版)に「致知に本づかずして徒らに以て格物する者、之を妄と謂ふ」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十四】

聞驢悟道、因触而碎。悟在聞前、道在驢外。

〔訓読〕

驢を聞き道を悟り、触るるに因りて碎かる。悟りは聞くの前に在り、道は驢の外に在り。

〔語釈・出典〕

○聞驢 『五灯全書』卷第六十四に「驢の鳴くを聞き大悟して乃ち曰く、…」とある。

〔校異〕(一) 『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) 『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) 『明儒学案』

本則は『明儒学案』と一致する。

【三十五】

先師詩云、人間白日醒猶睡。老子山中睡亦醒。醒睡兩非還兩是。溪雲漠漠水冷冷。学者紛紛解說、愈解愈遠。請看溪雲一句已註之矣。

〔訓読〕

先師の詩に云ふ、人間白日醒猶ほ睡。老子山中睡も亦醒。醒睡兩つながら非か還た兩つながら是か。溪雲漠漠たり水冷冷たり、と。学者紛紛として解説し、愈いよ解して愈いよ遠し。請ふ、溪雲の一句已に之に註するを看よ。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』卷二十、外集 二、詩、南都詩四十七首「山中懈睡四首」第四首。『王文成公全書』の方では「老子山中睡亦醒」を「老子山中睡却醒」に作る。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』に収められていない。

【三十六】

先師提出良知二字、教人何等平実何等易曉。克得尽時、便是聖人。然先師胸中至樂至妙處未嘗一毫形露。惟日乾乾而已。此可見其大而人不可及也。

〔訓読〕

先師、良知の二字を提出し、人に教ふるは何等の平実、何等の曉り易きや。克(得)ち尽す時、便ち是れ聖人なり。然れども先師は胸中至樂至妙の處、未だ嘗て一毫も形露せず。惟だ日に乾乾たるのみ。此れ其の

大を見るべくして人の及ぶべからざるなり。

〔語釈・出典〕

○乾乾 工夫をおこたらないさま。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』に収められていない。

【三十七】

遭大難如無事、当大任如無為、具大智如無知、成大功如無能、受大謗如無聞、消大怨如無迹、施大恩終不言、引後進若不及、処富貴若無与、混大道於無名、示至教於常經、密心学於無声、泯至業於不形。此先師陽明之所以為大也。

〔訓読〕

大難に遭ひて無事の如く、大任に当りて無為の如く、大智を具へて無知の如く、大功を成して無能の如く、大謗を受けて無聞の如く、大怨を消して無迹の如く、大恩を施して終に言はず、後進を引き及ばざるが若

く、富貴に処して与る無きが若く、大道を混ざるに無名においてし、至教を示すに常経においてし、心学を密すに無声においてし、至樂を混むに不形においてす。此れ先師陽明の大たる所以なり。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』に収められていない。

【三十八】

先師面命余曰、孟子三自反後、比妄人為禽獸、此処似尚欠細。蓋横逆之来、自謗訕怒罵以至於不道之甚、無非是我実受用得力処。初不見其可憎。所謂山河大地尽是黄金、滿世間皆藥物者也。

〔訓読〕

先師余に面命して曰く、孟子三たび自ら反りて後、此の妄人、禽獸と為す、此の処尚ほ細を欠くるに似たり。蓋し横逆の来は謗訕怒罵より以て不道の甚だしきに至るまで是れ我が実に受用し力を得る処に非ざるは無し。初めより其の憎むべきを見ず。所謂山河大地尽く是れ黄金、滿世間は皆藥物なる者なり。

〔語釈・出典〕

○孟子三自反後、比妄人為禽獸 『孟子』離婁下に「此に人有り、其の我を待つに横逆を以てすれば、則ち君子は必ず自ら反みるなり。我は必ず不仁なり、必ず無礼なり、此の物奚ぞ宜しく至るべけんや、と。其の自ら反みて仁、自ら反みて礼有り、其の横逆由是のごとくならば、君子は必ず自ら反みるなり。我は必ず不忠なり、と。自ら反みて忠なるも、其の横逆由是のごとくならば、君子曰く、此れ亦た妄人なるのみ。此の如きは則ち禽獸と奚ぞ擇ばんや。禽獸に於て又何ぞ難ぜん、と」とある。

○謗訕怒罵 そしり、いかりののしる。

○山河大地尽是黄金、満世間皆藥物者也 『古尊宿語録』卷第二十に「山僧、今日、山河大地をもつて尽く黄金と作す」とあり、卷第四十二には「尽大地是れ藥」とある。

〔校異〕(一) 『陽明先生遺言録』

本則の「孟子三自反後、く満世間皆藥物者也」の部分は『陽明先生遺言録』上、四十四条と一致し、『陽明先生遺言録』には「先師面命余曰」の六字がない。

〔校異〕(二) 『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) 『明儒学案』

本則の「横逆之來、く満世間皆藥物者也」の部分は『明儒学案』と一致し、『明儒学案』には「先師面命余曰、孟子三自反後、比妄人為禽獸、此処似尚欠細。蓋」の二十五字がない。

〔校異〕（四）（「尊經閣文庫本」）

「尊經閣文庫本」は「比妄人為禽獸」の「比」を「此」に作る。本則はこれに従って読んだ。

【三十九】

儒釈之辨、此千載不決之疑案。以愚觀之、曾無足論。古今豪傑、智不足以知此也。蓋道眼不明、客氣用事、代相因襲、以夢伝夢、將六合内一片公共道理、割而私之、封植自固。噫、小之乎。安得三代之英而与之論此哉。

〔訓読〕

儒釈の辨は、此れ千載不決の疑案なり。愚を以て之を觀れば、曾て論ずるに足る無し。古今の豪傑は、智、以て此を知るに足らざるなり。蓋し道眼明らかならず、客氣もて事を用ひ、代々相ひ因襲し、夢を以て夢に伝へ、六合内の一片の公共の道理を將て、割きて之を私し、封植して自ら固くす。噫、之を小とするかな。安くにか三代の英を得て之と此を論ぜん。

〔語釈・出典〕

○疑案 解決しがたい問題。

○道眼 真妄を弁別する能力。

○客氣 氣おい。

○六合 天下。世間。

○封植 栽培する。封殖。

○三代之英 「三代」とは夏・殷・周のこと。『礼記』礼運篇に「孔子曰く、大道の行はれしと、三代の英とは、丘、未だ之に逮ばざるなり。而れども志有るなり」とある。

○安得 願望をあらわす。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十】

宋儒読書多者、莫如浹際鄭氏。而浹際所見、能不為書所縛。觀其言曰、無義之理、理之真。有義之理、理之失。多義之理、理之妄。真豪傑也。後之學者未嘗不欲求道。然出於勝心而不自覺、惟知口所能宣、思所能及。殊不知、講解雖詳未可論於密也。

〔訓読〕

宋儒、書を読むこと多き者は、浹際鄭氏に如くは莫し。而れども浹際の見るところは、能く書の縛る所と為ら

ず。其の言を観るに曰く、義無きの理は、理の真。義有るの理は、理の失。義多きの理は、理の妄、と。真に豪傑なり。後の学ぶ者は未だ嘗て道を求むるを欲せずんばあらず。然れども勝心に出でて自ら覺らず、惟だ口の能く宣ぶる所、思ひの能く及ぶ所を知るのみ。殊に知らず、講解詳らかなりと雖も未だ密を論ずべからざるを。

〔語釈・出典〕

○ 沆際鄭氏 鄭樵（一一〇四～一一六二）。字は漁仲、莆田の人。夾漈先生と称される。

○ 無義之理、理之真。→多義之理、理之妄 出典未詳。

○ 講解 書物などの内容を分かりやすく解説する。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）（『王文成公全書』）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）（『明儒学案』）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十一】

得了頭腦、則讀書窮理皆是工夫。否則皆是禍崇。

〔訓読〕

頭腦を得（了）れば、則ち読書窮理は皆是れ工夫なり。否ずんば則ち皆是れ禍崇なり。

〔語釈・出典〕

○頭腦 根本、急所。

○禍崇 わざわいとがめ。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）（『王文成公全書』）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）（『明儒学案』）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十二】

千休千処得、一念一生持。此白沙十字経也。

〔訓読〕

千休を千処に得、一念を一生に持す。此れ白沙の十字経なり。

〔語釈・出典〕

○千休千処得、一念一生持 工夫のありかたをいう言葉。『陳猷章集』卷四、五言古詩、「陳宗湯・

湛民沢、江門を過らんと欲するも、颶風に遇ひ果たさざるを聞き、張廷実の韻を用ひ之に寄す」に

「客来、何ぞ遅るるを怨まん。千休を千処に得、一念を一生に持す」とある。

○白沙 明・陳猷章（一四二八〜一五〇〇）。字は公甫、新会の人。白沙先生と称される。

○十字経 わざわいを除き、さいわいを求める呪文。なお九字経というものもあり、道教・兵法で使われる呪文のこと。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）（『王文成公全書』）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）（『明儒学案』）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十三】

世間心放得下、便是精進。白沙先生曰、吾之学務求退。是以退為進也。

〔訓読〕

世間の心を放（得）下せば、便ち是れ精進なり。白沙先生曰く、吾の学は、務めて退を求む、と。是れ退

を以て進と為すなり。

〔語釈・出典〕

○放得下 放ち去ること。放十得のかたちで可能を表す補語を導く。

○精進 もとは仏教語。俗縁を断ち潔斎することであるが、ここでは修養の意。

○吾之学務求退。是以退為進也 『陳獻章集』卷二、「陶方伯に与ふ」に「某は独り然らず、是れ退を以て進と為す。高明に非ざれば能く之を亮かにする莫し」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十四】

心体如鏡、無所不照。而不容留滯。留滯則失照。故曰、人性上不可添一物。

〔訓読〕

心の体は鏡の如くにして、照らさざる所無し。而して留滯すべからず。留滯すれば則ち照らすことを失ふ。

故に曰く、人性上に一物も添ふべからず、と。

〔語釈・出典〕

○心体如鏡 『伝習録』上、第六二条に「曰仁云ふ、心は猶ほ鏡のごときなり。聖人の心は明鏡の如く、常人の心は昏鏡の如し。近世の格物の説は、鏡を以て物を照らすが如く、照上に功を用ひ、鏡の尚ほ昏在することを知らず。何ぞ能く照らさん。先生の格物は、鏡を磨きて之を明らかならしむるが如く、磨上に功を用ふ。明らか（了）にして後、亦未だ嘗て照らすことを廃さず」とある。なお「照」とはうつす意であるが、ここでは伝統的な読みに従い「てらす」と訓じた。

○人性上不可添一物 『伝習録』上、第三条に「心は即ち理なり。此の心、私欲の弊無ければ即ち是れ天理にして、外面より一分を添ふるを須ひず」とある。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）（『王文成公全書』）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）（『明儒学案』）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十五】

或問象山近作何功。象山曰、在人情事變上□□工夫。噫、除却人情事變、無用力之地矣。孰謂象山為禪学哉。

〔訓読〕

或ひと象山に近ごろ何の功を作すかと問ふ。象山曰く、人情事變の上になりにて些かの工夫を做す。噫、人情事變を除却せば、用力の地無し、と。孰れか象山を謂ひて禪学と為すや。

〔語釈・出典〕

○或問象山近作何功。象山曰、在人情事變上□□工夫 『陸九淵集』卷三十四、語録上、第四十一条に「復齋家兄、一日、見問して云ふ、吾弟、今、何処になりにて工夫を做す、と。某、答へて云ふ、人情・事勢・物理上に在りて些かの工夫を做す」とある。

○孰謂象山為禪学哉 『朱子語類』卷一百二十四、第四十四条に「先生、嘗て説く、陸子静・楊敬仲自らはれ十分好人なり。…蓋し其の本、是れ禪学と謂ふは、却て以へらく、吾が儒の説話の遮掩なり、と」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四) (『尊經閣文庫本』)

「尊經閣文庫本」は「在人情事變上□□工夫」の□□を「做些」に作る。本則はこれに従つて読んだ。錢明編校整理 陽明後学文献叢書『徐愛 錢德洪 董濼集』は□□を「做得」に作るが誤り。

〔四十六〕

白沙先生詩云、心不能外事、事不能外理。二障仏所名、吾儒寧有此。先生之意不知云何。愚觀箋註似亦未盡者。蓋心即事、事即理、有三名而無二物。故禪者之說曰、愚人除事不除心、智者除心不除事。其言未為不是、其所謂心指有我之私而言耳。事理塞滿天地、原無空処可逃。若欲逃空真是愚夫。正乃禪門之所賤也。二障者禪門有除事障除理障之說。蓋事固有障、私欲是也。理亦有障、以道為樂是也。善乎、伊川夫子言、曰若說顔子樂道、孤負顔子。伊川可謂發盡孔顔之秘矣。蓋廓然太虚理盡而止、初無可樂、不必矜持。無樂之樂、樂莫大焉。知其為樂、則有不樂、亦未樂也。樂横於中是亦有我、非障而何。除事障易、除理障難。小心翼翼、除事障也。不識不知、除理障也。不遷不貳、除事障也。心齋坐忘、除理障也。大学既誠意矣、又正心者、誠意除事障也、正心除理障也。禪門但除二障、豈云除事理哉。噫知我罪我、其惟斯言乎。

〔訓読〕

白沙先生の詩に云く、「心は事を外とする能はず、事は理を外とする能はず。二障は仏の名づくる所にして、吾儒寧ぞ此れ有らんや。」と。先生の意、云何かを知らず。愚、箋註を観るに、亦た未だ尽くさざる者

に似たり。蓋し心は即ち事、事は即ち理、三名有りて二物無し。故に禪者の説に曰く、「愚人は事を除くも心を除かず、智者は心を除くも事を除かず」と。其の言未だ不是と為さず、其の所謂心は有我の私を指して言ふ。事理は天地に塞満し、原より空処の逃がるべき無し。空に逃がれんと欲するが若きは真に是れ愚夫なり。正に乃ち禪門の賤しむ所なり。二障は禪門に事障を除き理障を除くの説有り。蓋し事は固より障有り、私欲是れなり。理も亦た障有り、道を以て樂と為す、是れなり。善きかな、伊川夫子の言、「若し顔子、道を樂しむと説かば、顔子に孤負せん」と曰ふ。伊川、孔顔の秘を發し盡くせりと謂ふべし。蓋し廓然たる太虚の理は盡きて止まり、初めより樂しむべき無く、矜持するを必せず。樂しみ無きの樂しみ、樂しみは焉れより大なるは莫し。其の樂しみたるは、則ち樂しまざる、亦た未だ樂しまざるもの有るを知る。樂しみ、中に横たわるも是れ亦た我有り、障に非ずして何ぞや。事障を除くは易く、理障を除くは難し。小心翼翼は、事障を除くなり。不識不知は、理障を除くなり。不遷不貳は、事障を除くなり。心齋坐忘は、理障を除くなり。大学既に意を誠にし、又心を正す。誠意は事障を除くなり。正心は理障を除くなり。禪門は但だ二障を除く、豈に事理を除くと云はんや。噫、我を知り我を罪するは、其れ惟だ斯の言なるかな。

〔語釈・出典〕

○二障 理障と事障を指し、仏教語である。理障はもともと真如の理に達することを阻む根本無明、事障はもともと生死を繼續する原因となる煩惱をいう。ところがここでは理に対する障、事に対する障という意で用いられている。

○心不能外事、事不能外理。二障仏所名、吾儒寧有此 『陳獻章集』下、卷五、隨筆第一首に「心は

事を外とする能はず、事は理を外とする能はず。二障は仏の名づくる所にして、吾儒寧ぞ此れ有らんや」とある。

○愚観箋註似亦未尽者 「箋註」とは、陳猷章の随筆第一首に対する湛若水の解釈（『白沙子古詩教解』卷之下所収）を指す。「亦た未だ尽くさざる者に似たり」と董濬は湛若水の解釈に不満の意をあらわしている。先ず董濬はこの詩の主題である二障について、「事理は天地に塞満し、原より空処の逃がるべき無し」と述べ、事と理そのものを除くのではなく、事についての障、理についての障を除くべきだとする。湛若水の「箋註」（『白沙子古詩教解』）では程子の「釈氏、理を識らず、理、何の障有らん」という語を引くのは董濬の二障観と重なるが、「先生随筆の詩、深く釈氏の学を闡け、至つて明白痛快と為す。学者、宜しく細玩すべし」と結び、陳猷章の随筆第一首を仏教批判の典型と読む。しかし董濬は「禪門は但だ二障を除く、豈に事理を除くと云はんや。噫、我を知り我を罪するは、其れ惟だ斯の言なるかな」とあるようにこの禪門の考えを肯定し、仏教であれ取るべきものは取るといふ立場をこの詩の解釈に投影しようとしている。「亦た未だ尽くさざる者に似たり」というのは、仏教観をめぐる両者のずれによるものであろう。

○愚人除事不除心、智者除心不除事 『景德伝灯録』卷九に「愚人は事を除き心を除かず、智者は心を除き事を除かず」とある。

○塞満 いっぱいにみち塞がる。

○日若説顔子楽道、孤負顔子 『震沢語録』に「伊川、学者に問ふ、顔子、楽しむ所は何事ぞ、と。

或ひと曰く、道を楽しむ、と。伊川曰く、若し顔子、道を楽しむと説かば顔子に孤負せん。…とある。

○孤負 そむく。

○廓然 がらんとして中空であるさま。

○小心翼翼 『詩経』大雅、文王之什、大明に「維れ此の文王、小心翼翼」とある。

○不識不知 『詩経』大雅、文王之什、皇矣に「識らず知らず、帝の則に順ふ」とある。

○不遷不貳 『論語』雍也第六に「顔回なる者有り、学を好み、怒を遷さず、過ちを貳せず」とある。

○心齋 雑念をのぞき、虚静純一な心境。『荘子』内篇人間世篇に、「仲尼曰く、若、汝の志を一にせよ。之を聴くに耳を以てすること無くして、之を聴くに心を以てせよ。之を聴くに心を以てすること無くして、之を聴くに氣を以てせよ。耳は聴に止まり、心は符に止まるも、氣なる者は虚にして物を待つ者なり。唯だ道は虚に集まる。虚とは心齋なり」とある。

○坐忘 物我の区別を忘れた無我の心境。

○誠意 『大学』経に「其の心を正さんと欲する者は、先ず其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先ず其の知を致す」とある。

○正心 同右。

○知我罪我 『孟子』滕文公下に「孔子曰く、我を知る者は其れ惟だ春秋なるか。我を罪する者は其れ惟だ春秋なるか」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則是『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則是『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則是『明儒学案』には収められていない。

【四十七】

道不属知、不属不知。教不属言、不属不言。

〔訓読〕

道は知に属せず、不知に属せず。教へは言に属せず、不言に属せず。

〔語釈・出典〕

○道不属知、不属不知 『大慧普覚禅師語録』大慧普覚禅師普説卷第十六に「道は知に属せず、不知に属せず。知は是れ妄覚、不知は是れ無記」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則是『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十八】

安心処所須無欲。近道工夫在省言。農事不忘苗不堰、不期多穀自逢年。

〔訓読〕

心を安んずるの処所は須く無欲なるべし。道に近づくの工夫は省言に在り。農事忘れず苗堰かず、多穀を期せずして自ら逢年。

〔語釈・出典〕

○農事不忘苗不堰 『孟子』公孫丑上に「心に忘るる勿れ、助長する勿れ。宋人の若く然する勿れ。

宋人に其の苗の長ぜざるを閔へて之を堰く者有り。…之を助けて長ぜしむる者は、苗を堰く者なり」とある。

○逢年 豊年のこと。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【四十九】

於事無心、於心無事、則虚而靈、空而妙矣。

〔訓読〕

事に於て心無く、心に於て事無ければ、則ち虚にして靈、空にして妙。

〔語釈・出典〕

○於事無心、於心無事、則虚而靈、空而妙矣 『大慧普覺禪師語録』大慧普覺禪師法説卷第二十一に

「汝、但だ事に心無し。事に心無ければ、則ち虚にして靈、空にして妙」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十】

心之難存甚於調猿、心之易惑甚於潰川。故吾道無捷徑之理、而有多岐之害也。

〔訓読〕

心の存し難きこと猿を調するより甚しく、心の惑ひ易きこと川を潰するより甚し。故に吾が道、捷徑の理無く、多岐の害有り。

〔語釈・出典〕

○捷徑 近道。

○潰川 川の堤防を決潰させること。

〔校異〕(一) 『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) 『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) 『明儒学案』

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十一】

至樂終難説、真知不著猜。此白沙人鬼閑也。

〔訓読〕

至樂は終に説き難く、真知は猜に著かず。此れ白沙の人鬼の閑なり。

〔語釈・出典〕

○至樂終難説、真知不著猜 陳献章の「黎蕭二生との別れに贈る」(『陳献章集』上、卷四、五言律詩)に「白髮、孤燈に坐し、青春の二妙來たる。…至樂は終に説き難く、真知は猜に著かず。…」とある。「真知不著猜」とは真の知はうたがいをいれないことをいう。

○人鬼閑 『朱子語類』卷十五、第八十五条に「格物は是れ夢覺閑。誠意は是れ善惡閑。…又曰く、誠意は是れ転閑處。又曰く、誠意は是れ人鬼閑」とある。

〔校異〕(一)『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)『明儒学案』

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十二】

千疑万疑、総は一疑。一疑既破、無疑可疑。

〔訓読〕

千疑万疑、総て是れ一疑。一疑既に破すれば、疑ひの疑ふべき無し。

〔語釈・出典〕

○千疑万疑 『大慧普覚禪師語録』大慧普覚禪師書卷第二十八に「千疑万疑、只だ是れ一疑」とある。

〔校異〕(一)『陽明先生遺言録』

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)『王文成公全書』

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)『明儒学案』

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十三】

未悟真機氣悶時、誰知氣悶即真機。要離氣悶求無悶、却是穿衣更覓衣。

〔訓読〕

未だ真機を悟らずして氣悶ゆる時、誰か知らん、氣悶ゆるは即ち真機なり、と。氣悶ゆるを離れて悶え無きを求めんと要むるは、却て是れ衣を穿て更に衣を覓むるなり。

〔語釈・出典〕

○真機 動きだそうとするところ。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十四】

分明一座上天梯、手手攀援歩歩躋。今日恍然天上坐、却嫌一向被梯迷。却嫌一向被梯迷、不用攀援不用躋。自是從來天上坐、何嘗間隔一毫絲。

〔訓読〕

分明なるかな、一座の上天梯、手手攀援し歩歩躋る。今日恍然として天上に坐す、却て一向に梯に迷はさるるを嫌ふ。却て一向に梯に迷はさるるを嫌ひ、攀援するを用ひず躋るを用ひず。自らはれ從來天上に坐す、何ぞ嘗て一毫の絲を間隔せん。

〔語釈・出典〕

○上天梯 天に登るためのはしご。木製の工具であり、内丹の過程において、体位を調整するとき用いる。ここでは工夫の過程の比喩として用いられ、第二義的なものと位置づけられている。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十五】

吁嗟此学太無端、競作肥羊細酒看。只貴口中多咀嚼、更誇舌上有甜酸。千年白骨枯還硬、一□山泉淡且寒。我道此中真味在、持来争奈贈人難。

〔訓読〕

吁嗟、此の学太だ端無ければ、競ひて肥羊細酒と作し看よ。只だ口中咀嚼多きを貴び、更に舌上甜酸有るを誇れ。千年の白骨枯れて還た硬く、一勺の山泉淡くして且つ寒し。我が道、此の中に真味在り、持ち来るも争奈ぞ人に贈ること難き。

〔語釈・出典〕

○争柰 いかんぞ。奈何・如何と同じ意味。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四) (『尊經閣文庫本』)

「尊經閣文庫本」は「一□山泉淡且寒」の□を「勺」に作る。本則はこれに従って読む。

【五十六】

本無怨尤、何暇言命。

〔訓読〕

本と怨尤無ければ、何ぞ命を言ふに暇あらん。

〔語釈・出典〕

○怨尤 恨みごと。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十七】

心無体也、綱常倫理形質器用与心為体、拾万象無太虚、拾万事無心矣。分之為物、則合之則為心。見物便見心、離物見心亦是見鬼。此良背行庭之義也。

〔訓読〕

心は無体なり、綱常・倫理・形質・器用、心と体と為り、万象を捨てて太虚無く、万事を捨てて心無し。之を分かつてば則ち物と為し、之を合すれば則ち心と為す。物を見ることは便ち心を見ること、物を離れ心を見ることも亦た是れ鬼を見ること。此れ良背行庭の義なり。

〔語釈・出典〕

○良背行庭之義 『易』艮卦卦辞に「其の背に良まりて、其の身を獲ず。其の庭を行きて、其の人を見ず」とある。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は次の二箇所において『明儒学案』と異なる。

○拾万象無太虚、拾万事無心矣 『明儒学案』は「舍万象無太虚、舍万事無心矣」に作る。本則はこれに従って読んだ。

○分之為物、則合之則為心 『明儒学案』は「分之則為物、合之則為心」に作る。本則はこれに従って読んだ。

【五十八】

性火真空、性空真火、性水真空、性空真水。古人造語之妙如此。蓋理勝則文自奇矣、不分体用顕微。

〔訓読〕

性火真空、性空真火、性水真空、性空真水。古人造語の妙、此くの如し。蓋し理勝れば則ち文自ら奇にして、体用顕微を分かつたず。

〔語釈・出典〕

○性火真空、性空真火、性水真空、性空真水 『大仏頂万行首楞嚴經』卷第三に「汝、猶ほ如来蔵の

中の性火真空、性空真火は清淨本然にして、法界に周徧し、衆生の心に随ひ、所知の量に應ずることとを知らず。：汝、尚ほ如来蔵の中の性水真空、性空真水は清淨本然にして、法界に周徧し、衆生の心に随ひ、所知の量に應ずることとを知らず」とある。

○体用顕微 程頤の「易伝序」に「体用一源、顕微無間」とある。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）（『王文成公全書』）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）（『明儒学案』）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【五十九】

或有問儒釈同異於余者。余答之曰、公未得其同、先議其異烏乎可。苟得其同矣、以之事君父蓄妻子存髮喰肉、烏乎不可。象山云、公先理会同的一端、則凡異乎此者、皆謂之異端。噫異端多矣、豈必西方哉。

〔訓読〕

或ひと儒釈の同異を余に問ふ者有り。余、之に答へて曰く、公、未だ其の同を得ず、先ず其の異を議するは烏んぞ可ならん。苟くも其の同を得、之を以て君父に事へ妻子を蓄ひ髪を存し肉を喰らへば、烏んぞ不可

ならん、と。象山云ふ、公、先ず同じきの一端を理会すれば、則ち凡そ此に異なる者、皆な之を異端と謂ふ、と。噫、異端多し、豈に必ずしも西方ならんや。

〔語釈・出典〕

○象山云、く皆謂之異端 『陸九淵集』卷三十四、語録上、第五十三條に「子、先ず同底の一端を理会し得れば、則ち凡そ此れに異なる者は皆異端なり」とある。なお異端については『伝習録』下、第七十一條に「愚夫愚婦と同じきの、是を同徳と謂ひ、愚夫愚婦と異なる的、是を異端と謂ふ」とあり、『陽明先生遺言録』上、第四十五條には「異同の論は皆是れ性を説き性を見るに非ず。性を見るとは異同の言うべき無し」とある。

○西方 仏教をさす。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【六十】

或疑白沙藏而後発等語近禪。愚以為未能直造不疑之地、只管求他近禪不近禪、都不是。

〔訓読〕

或ひと白沙の藏して後、発する等の語、禪に近しと疑ふ。愚以為らく、未だ直ちに疑はざるの地に造る能はずして、只管、他の禪に近きか禪に近からざるかを求むれば、都て是ならず、と。

〔語釈・出典〕

○藏而後発 『陳猷章集』上、卷二、「復張東白内翰」に「知者は能く至無を至近に知れば、則ち動くとして神に非ざる無し。藏して後、発し、其の幾に明らかなり」とある。

○只管 ひたすら。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【六十一】

勝心世人之通病、我慢嗔貪佞傲誇競邪暴諸欲皆起於此。

〔訓読〕

勝心は世人の通病、我慢・嗔貪・倭傲・誇競・邪暴の諸欲、皆な此こに起る。

〔語釈・出典〕

○嗔貪 憎み憤り、事物に執着すること。

○倭傲 口先がうまくて気ままであること。

○誇競 ほこり競うこと。

〔校異〕(一)〔陽明先生遺言録〕

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)〔王文成公全書〕

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)〔明儒学案〕

本則は『明儒学案』には収められていない。

【六十二】

虚靈之道操則存、存則事、為不苟、常令此心在無物処、故虚靈。

〔訓読〕

虚靈の道、操れば則ち存し、存せば則ち事とし、不苟を爲し、常に此の心をして無物の処に在らしむ。故

に虚靈なり。

〔語釈・出典〕

○操則存 『孟子』告子上に「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡す。出入時無く、其の郷を知る莫しとは、惟だ心の謂ひか」とある。

○不苟 なおざりにしないこと。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二) (『王文成公全書』)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三) (『明儒学案』)

本則は『明儒学案』には収められていない。